
異説御伽噺 「マッチ売りの少女」

神田白兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異説御伽噺 「マッチ売りの少女」

【Nコード】

N1071K

【作者名】

神田白兎

【あらすじ】

とても寒い、聖夜。少女が灯すマッチの火は、少女が望む幻を見せてくれます。触れられない、すぐに消えてしまう幻を見せ、マッチは少女に何を与えるのか？異説「マッチ売りの少女」、開幕。

雪が舞い散る、とても寒い聖夜。

一人の少女が、天に召されました。

その少女は、凍った地面を裸足で歩き、かじかむ手でマツチを差し出し、紫色になった唇を震わせて、大通りで人々に呼びかけました。

「マツチはいりませんか？ マツチを買ってください……」

誰もが、その少女を見ないふりして立ち去り、過ぎ去っていきます。時には露骨にいやな顔をしたり、わざとぶつかって少女を転ばせて、嘲笑う者までいました。

それでも少女は懸命に言います。

「マツチはいりませんか？」

「ください」

少女と同じ年くらいの少年が、少女に歩み寄って言いました。少年は、年こそは同じくらいですが、薄汚れて擦り切れたボロをまとった少女とは違い、綺麗に仕立てられた服を着た、いかにもお金持ちの子供でした。

けどその少年は、少女を見下し、嘲った人々とは違い、きらきらと輝く瞳で少女を見ます。

それは幼くて拙い、けれど確かな恋する瞳でした。

少女も、寒さで青白かった顔にほのかな朱をさして、少年を見つめ返します。

「こんにちわ。いつも、ありがとうございます」

「ううん。お父様からお使いなんだ。気にしないで」

いつもお互いそう言って、少年はマツチを一箱買います。毎日毎日、同じことを言い合って。

「……今日は、すごく寒いけど、大丈夫？」

「……ええ。平気です。夜には帰りますし」

裸足の少女に、心配そうな目で少年が尋ねると、少女は優しく笑って答えました。

少女の返答に、少しは安心したのか、少年も笑って、コートのポケットから何かを取り出して、少女に差し出します。

「……これ。古着で悪いんだけど、今日は……クリスマス・イヴだから」

差し出されたのは、厚手の靴下でした。

きつと、家から持ち出したものでしょう。きつと、本当は靴をあげたかったのですが、お小遣いが足りなかったのか、親に無駄遣いだと叱られたのか……、精一杯考えた上でのプレゼントでしょう。

「——ありがとうございます。……すごく、嬉しい」

今にも泣き出しそうなくらい、嬉しそうに笑った少女に、少年は真っ赤な顔を隠すように俯いて、立ち去る間際に言いました。

「メリー・クリスマス！」

日が沈み、人通りがなくなった大通りの片隅で、少女は膝を抱えて座り込んでいました。

少年に言った、「夜になれば帰る」という言葉は嘘でした。少女は、籠の中のマツチを売り切らなければ、帰ることを許されてはいないから。

少女の家は、昔は裕福とは言えないけれど、ごく普通に生活ができて、優しい両親に愛されて、満ち足りた生活を送っていました。けれど、父親が職を失い、母はその心労で亡くなってから、少女の生活は一変しました。

父親はいつもお酒ばかり飲んで、少女がマツチを売って稼いだお金を奪い、そのお金が少ないと言って、少女を殴ります。

少女は、父親に殴られることよりも、優しくて頼もしかった父が変貌してしまったことが悲しくて、いつも涙しますが、父は娘の気

持ちなど気付かず、泣き声がうるさいと、また殴ります。

少女は、今日も一つしか売れなかったマツチ箱の入った籠を抱きしめて、自分のつま先を見ました。

汚してしまうのがとても気に病んだけど、寒さに耐えきれず履いた、少年からもらった靴下。

その靴下に包まれるぬくもりだけが、今の少女には幸せでした。

「……神様はどうして、こんなにづらい試練を与えるのかしら？」

真っ赤になった手に息を吐きかけて、ぼんやり少女は呟きました。その問いかけに答える者は、誰もいません。

夜は更け、雪がちらちら降り始めましたが、少女はまだ家に帰りません。

せつかくのイヴなのに、「メリー・クリスマス」と言ってもらえたのに、家に帰って父親に殴られて、泣きたくはなかったから。

けれどいくら体を震わせても、手に息を吐きかけても、寒さは和らぐことなく、どんどん少女の体温を奪っていきます。

売り物を自分で使った事を知られば、父親に顔が腫れあがるほど殴られることはわかっていましたが、少女はついに耐えきれなくなり、震える手でマツチを一本、擦りました。

小さな炎が灯り、少女はその火で寒さをしのぎます。

「……暖かい。……昔は、暖炉の前で暖まりながら、お母さんに本を読んでもらっていたのに……」

ふと、そんなことを呟いて、思い出に浸っていると、マツチの火が消える一瞬、大きくて立派な、暖かい暖炉が見えました。

少女はパチパチ瞬きをして、あたりを見渡しましたが、もちろんそこは雪の降る通りの片隅。暖炉なんて、あるわけがありません。

少女は、気のせいだと言い聞かせながら、でもどこか大きく期待しながら、もう一度マツチを擦ってみました。

すると今度は、間違いなく大きくて立派で温かい暖炉が見えました。

少女は暖炉に手をかざして、温まりました。体の芯から、温まる感覚に、少女は目を閉じて味わいましたが、マッチの火が消えると、暖炉もまたすぐに消えてしまいます。

少女は何度も何度もマッチを擦りました。

そのたびに、おいしそうなご馳走、たくさんのプレゼント、煌びやかなクリスマスツリーが見えますが、どれもこれもマッチが消えると、儚く消えてゆき、少女の元には何も残りません。

初めのうちは、少女は喜び、楽しんでいましたが、だんだん触れることもできず、すぐに消えてしまう幻を、ただ見ているだけの自分がいじめに思えてきました。

「神様！ 何故、こんな幻を見せるのですか！？ 何故、手に入らないものばかりを、見せつけるんですか！？ 神様まで、私のみじめさを見て、笑っているんですか！？」

とうとう我慢できなくなった少女は、叫びました。

泣きながら叫び、残っていたマッチをすべてすり、神様に訴えます。

「どうせ、手に入らないというのなら、ただの幻だというのなら、私の一番の願いをかなえてください！ 私が一番欲する、『あの人』を見せてください！！」

たくさんのマッチの炎が上がり、あたりは昼間のように明るく、そして春のように暖かくなりました。

……ですが、何故でしょう？

今まで少女の望むものを、幻とはいえ見せていたのに、今は、何も見えません。

少女が望む人の幻は、現れてくれません。

「——神様……、どうして？」

少女は泣きながら、雪の中に倒れました。

燃え尽きたマッチが、あたりに燻って煙を上げていました。

ふと、少女はぬくもりを感じました。

マッチの熱さではない、とても心地のいい、優しいぬくもりを。重たい瞼開けると、そこには昼間、マッチを買って、靴下をくれた少年がいました。

少女が最も望んだ人が、泣きながら、少女を抱きかかえていました。

「……どう……して？ どうして……あなたが……ここに？」

「……マッチを、……マッチをするたびに、君が見えたから。……お母様が、ランプや蠟燭に、火をつけるたびに、お父様が、煙草に火をつけるたびに、……寒さに震える君が、見えたから……」

言って、少年は冷え切った少女を強く抱きしめます。

防寒着も来ていない少年。きつと、マッチが見せる少女の幻に我慢できず、親の制止も振りほどいてきたのでしょうか。

マッチは、少女に幸せな幻を見せると同時に、少年に少女の現実を訴え続けていたのです。……もしかしたら、少女が見ていたものはすべて、少年の家のものだったのかもしれませんが。

マッチは、互いに想い合う少女と少年を、繋げていました。

「僕のうちに行こう？ お父様とお母様が何を言っても大丈夫だから。僕が、君を守るから」

少年は泣きながら、必死に笑って、少女に言いました。

けれど少女は弱々しく、けれど確かに首を横に振りました。

「——いいんです。私はもう……。天使様が、来てくれたから、もう……」

そう言って瞳を閉じた少女は、もう二度と、目を覚ますことはありませんでした。

燃え尽きて、マッチが吐き出す煙が、少女の目には純白の翼に見えたこと、少女にとって、少年が天使だったことに、少年は気が付くことはありませんでした。

決して少女の人生は、幸せとは言い切れませんが、絶対に少女は不幸ではありません。

少女は神様のお膝元で、安らかに眠り続けています。

少女を自分の腕の中で失った少年が、深く悲しみ、その悲しみを受け入れ、乗り越えてゆき、もう少女のような子供を、二度と出さないと決意し、尽力し続け、天に召されて再び出会う日を、ずっと待っています。

（後書き）

異説御伽噺シリーズ第九弾。アンデルセン、再び。

あまり変えようのない話だから、恋愛要素をちよつとたすだけのつもりだったけど、意外と内容が結構変った気がする。

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。
もしよろしければ、感想もお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1071k/>

異説御伽噺 「マッチ売りの少女」

2010年10月8日15時23分発行